

【論文】

アンドレ・ブルトン『通底器』における 夢の記述の一読解の試み（Ⅱ）

泉谷安規

（承前）

Ⅱ－3. 二つの夢

『通底器』の第1部には、ブルトンの夢が二つ収められている。第一の夢は、1931年8月26日の日付を持つもので、第二の夢は同年4月5日の夢となっている。本稿では、第一の夢だけを取り上げ、分析の対象としていきたい。ここで第一の夢だけを取り上げるのは、第二の夢は夢の分析それ自体が目的なのではなく、いわゆる夢のなかにおける「現実性」が問題にされ、その実例としての夢が提示されているからである。例えば、よくあることだが、夢のなかで頬をつねると痛いという感覚を覚え夢を現実と思い込んだり、夢のなかに別の夢が入ってきてそれを意識することによって、今見ている地の夢が夢ではなく現実であると判断するというような、夢の詐術的操作の実例をブルトンは提供している¹⁾。と同時に、夢のなかにおけるこの現実性は、実は、ブルトンにとっては夢が与えてくれる、ある稀有な奇跡的ともいふべき可能性をもたらしてくれるのだが、これについては、後で論じることにする。

最初の夢の話に戻ると、ブルトンによる夢の自己分析は、用意周到を極め、形式上はフロイトの分析例に忠実に従っている。すなわち、夢の記述とその自己分析（「分析 analyse」）とのあいだに「解説的覚書 note explicative」が置かれ、この夢を見た現時点のブルトンの個人的社会的状況ができるだけ詳しく報告され、それが夢の理解を助けてくれる。またフロイト的な意味において、ここで「解説的覚書」が加えられているのは、夢を形成する材料が前日ないしはそれ以前の過去の記憶（たいていは幼児期の記憶）から汲み取られていて、夢分析のためにはそれらに関する情報が不可欠であるからである²⁾。こうした二重の理由により、この夢は、それを見たブルトンが当時どのような状態にあったのか、何に悩み、何を求めていたのかを再現する装置であり、1931年8月26日のブルトンとは誰であったのかを忠実に映す鏡（少々歪んではいるとしても）といえるだろう。

具体的には³⁾、情動的・愛情のレベルにおいては、恋人であるシュザンヌ・ミュザールとの別離が決定的になり、失意のどん底にあったブルトンは、唯一の愛、それがなくては生きてゆけない愛する女性を求めて死に物狂いの彷徨と模索を続けていた。と同時に、このシュザンヌとの別れの原因として、二人の性格の不一致や恋愛のモラルの問題はもちろんのこと、さらにはそこには経済的

な要因、つまりシュザンヌが十分な生活を送れなかったのは自分が貧しくて援助できなかったせいではないかと煩悶を繰り返していた。実は、このシュザンヌとブルトンとの関係は複雑で、ブルトンは最初の妻であるシモーヌと離婚したばかりであり（1929年）、シュザンヌのほうでもエマニュエル・ベルルという作家のれっきとした夫がいて、彼女は元々は、貧困のゆえに娼婦の館にいたところをベルルに見染められたという経緯がある。そのベルルと暮らしていた最中にブルトンと出会い、駆け落ちまがいのアヴァンチュールを試みたりしている⁴⁾。最終的には、シュザンヌはブルトンよりもベルルを選んで離れていくわけだが⁵⁾、その余波が『通底器』の第一部と第二部の暗い基底をなしている。ここで付け加えるなら、ブルトンはシュザンヌを失った原因の一つである自らの経済的不如意にまたしても大きく傷つき、『ナジャ』以来抱き続けていた社会的な貧困が原因となって引き起こされる個人レベルの恋愛の挫折という問題に再び言及している（ナジャとの別離にもまた金銭問題が絡んでいたことを思い出されたい）。

次に、公的な問題、つまりはシュルレアリスム運動に関してであるが、シュルレアリスム運動はこの時期、深刻な二つの問題を抱えていた。まず、発足当初の親しいメンバーがブルトンのもとから離れていき反目するなど（「屍骸」パンフレット事件、『シュルレアリスム第二宣言』の執筆、そしてアラゴン事件など）、シュルレアリスムはその活動内容・方向ともに大きな軌道修正を迫られていた。この内部のごたごたに加えて、外部でもさまざまな問題が起こり、シュルレアリスムはそれに対する対応を迫られていた。そのなかでも大きな問題は、思想的にマルクス主義に大きく傾倒していったシュルレアリスム（『通底器』第三部にあらわされているように）は、フランス共産党との協同を深めるべきか否かという問題である。この時期、政治的・イデオロギー的な態度決定を求めて、外部組織の共産党からだけでなく、シュルレアリスムの内部からも批判の声が上がっていた。いわく、「革命」をいう道を選んだからには、そのために全て、「愛」や「芸術」、そしてシュルレアリスムそのものを捨てて、社会変革に取り組み、「革命」を実現させるべきであるというものが絶対命題のようなものとしてブルトンらを圧迫していた。ブルトンは、シュルレアリスム運動の解体については反対であったようだが、それゆえ、内的かつ外的圧力も強くなっていった。一例が、A. E. A. R.（革命的作家芸術家協会）における活動である。これは、ポール・ヴァイヤン＝クーチュリエ（後で分析するブルトンの夢のなかにも登場する）を書記長として1932年3月に正式に発足した組織であるが、もともとは1930年11月の第2回革命作家世界大会（ハリコフ会議）が開催されたときにできた「革命世界作家同盟（モルプ）」に由来する。後年のことになるが、このA. E. A. R. が主催したパリの「文化擁護国際作家会議」（1935年6月）にブルトンも参加し、講演する予定であった。だがその数日前、ブルトンは、シュルレアリスムを愚弄する発言をしたソ連の作家イリア・エレンブルグを平手打ちにしたため、結局、ブルトンの参加は拒否され、その原稿はエリユアールが代読することになる。しかも、その発表の時間は深夜に変更され、照明も十分ではなく、ほとんど聴衆もいなかったという。報復、いやがらせである⁶⁾。そのときエリユアールによって読まれたのが、『シュルレアリスムの政治的位置』に収録された、有名な次の一節を含んだテキスト

である。『世界を変革すること』と、マルクスは言いました。『人生を変えること』と、ランボーは言いました。これら二つのスローガンは、われわれにとっては、一つになるのです」(一九三五年六月、パリ)⁷⁾。

結局、ブルトンは、最後まで自らの主張を貫き、シュルレアリスムを解体することなく、その精神と運動を維持し続けた。そして、そこに当時の政治的・イデオロギー的選択肢をなんとか接合しようと努力したのである。それを端的に示しているのが、上に引用した、マルクスとランボーの名前を並列したスローガンであり、マルクスとランボーの名前のどちらかを排除することなく、両立させることであった。

Ⅲ－1. ブルトンの夢 (1)

さて、ここから、ブルトンの夢の検討に入るのだが、このようにして、この年は、公的私的な生活において、ブルトンにとっては「極度に暗い見通しをもって明けた」(O.C. t. II, p.120) 年であった。

それでは、問題の夢のテキストを見ていこう。題して「ノスフェラトゥのネクタイ」。

1931年8月26日の夢——暁方の3時に目覚める——ただちに記録。

ひどく落ち着かない様子をした一人の老女が、地下鉄のヴィリエ駅(むしろローム駅に似ている)からさほど遠くないところで、誰かを待ち伏せしている。彼女はX*をひどく憎んでいて、どんなことがあってもつかまえようとしており、そのためにXの生命は危機に瀕しているように私には思えた。Xはこの女のことを一度も私に話したことはなかったが、思うに、Xはこの女にいささかうしろめたいところがあり、つい最近までわれわれが借りていた部屋の在る家の界隈にやってくるのにわざわざタクシーに乗り、帰るときもこの家の戸口のところでタクシーが通りかかるのを待つようにしていたのは、たしかに彼女を避けるためであったらしい。Xはととても警戒して、通りには一歩も出なかったものだ。私は手元に残っていた金を全部彼女に渡して、家賃を払ってくれるように頼んだ、なぜなら、彼女はもうこれきり戻ってこないはずだから。多分、我々がこれまでにない深刻な言い争いをしたために、こんなことになったのだ。一人の友人——きっとジョルジュ・サドゥールだと思うが——と一緒に街(ローム街?)の入り口にさしかかったとき、われわれはその老女とすれ違い、彼女がじろじろと私の挙動をうかがっていることに私は気づく。彼女がこれから何をしようとしているのかを知るために、またおそらくは彼女の追跡の目をくらまそうとして、私は一枚の紙に何かを書きしるし、これから私は友人を私の昔の住居につれて行くのだということを彼女に信じこませようとする。彼女は字を読むことができるので、私は文字の順序を逆に並べることによって姓名を変えてみるが、すると驚くことにマノン(Manon)という語が現れる。さらに用心して、私はその語を《わが愛しの(machérie)》といった風の愛情表現の言葉と絡み合わせる。私には気が狂っているという印象を与えるその老女は建物のなかに入るが、その内部から、そこを管理しているほとんど姿の見えない人物が、私に入ってはいけないという合図をする。私は、むかしXが巻き添えになったらしい何か不愉快な事件——刑事事件か、狂

人の監禁といった事件——が起こったのではないかと恐れをいただく。

私の両親のもと、夕食時、私の見知らぬ家のなかで。私は、あの狂女の不意の闖入にそなえてピストルを携行し、白いテーブル・クロスのかかったかなり大きな四角いテーブルを前にしている。私は父にあの老女と出会ったことを話したに違いなかったが、その父はもっぱら的是ずれのことを考えている。つまり自分はXを知らないのだから、彼女がその老女「よりましであるか、ましでないか」ということは自分にはわからないし、わかる必要もない、などと屁理屈を並べたてているのだ。これを聞いて私は苛々し、そこに居合わせた人たちに証人になってもらい、父がまともな気持ちでまた私を傷つける意図をもたずに、話をしているのなら、二十歳の女と六十五歳の女（この二つの数は夢のなかでとくに強調されている）とをどうして比べたりすることができるのかとたずねる。それから、私は、自分だけの考えに没頭し、Xはもう二度と戻ってくることはないだろう、この老女は現にいま探している以外のところでは多分Xをつかまえることはできまい、と考える。こう考えて、私は安堵と口惜しさの入り混じった感情（この感情は夢のなかで直ちに分析された）におそわれる。

今度は私はある店のなかで、十二歳ぐらい（この数字は夢のなかでははっきりわからない）——十二歳ぐらいの少年が私に何本かのネクタイを見せている。そのなかから私の気に入ったものを一本買おうとしたとき、彼はひき出しのなかから別の一本を見つけだし、彼にすすめられるがままに私はそれをつけてみる。それは暗緑色のかかなり平凡なもので、ごく細い白の斜め縞が入っているが、私がつけている一本とそっくりである。だがその若い店員は、それが私の赤いワイシャツととてもよくお似合いですよと請け合う。もう一人の中年の店員が、もう一度店にあるネクタイをかきまわしながら、私に《ノスフェラトゥ (Nosferatu)》ネクタイの話をする。それは二年前にはよく売れたものだが、もう今ではその見本は一本も残っていないのではないかと彼は言う。するとすぐに私が、沢山あるなかからそのネクタイを見つけ出す。それは暗紅色のネクタイで、その両端の一つずつ——結んだときには——少なくとも見える方の端に、ノスフェラトゥの顔が二度、白く浮かび上がって現れる。その顔は同時に、地名標示など全くないフランスの地図になっており、その東部国境、緑と青でごく簡略にかかれていますので私にはむしろ河ではないかと思われたその東部国境は、実に人をびっくりさせるような具合にこの吸血鬼のメーキャップを描き出しているのだ。私は一刻もはやくこのネクタイを友人たちに見せてやりたくて仕方がない。

私は右の方に百八十度むきを変えている。別の売り場に、カシヤンのような体つきの一人の共産員がいる。彼は、私が近々することになっているらしいドイツ旅行について、なにかふくむところありげに私と話す。私はかなり御満悦である。ヴァイヤン＝クーチュリエが入ってきて、はじめ私に気づかないかのように振舞うが、そのあと私と握手する（私は座っている）。彼はこの旅行についてもっとこまかいところまで私と話をする。私はまずベルリンに行くことになるらしい。彼はかなり抜け目なく、「向こうの連中は、予定の講演の主題はまずたいいはシュルレアリスムだと思っただろう。これは間違いのないね。」などと自分の考えをのべる。私は心のなかで、物事をこんな形で言い表すことに嘲りを感じる。明日出発だ。ついさっき少しばかり金を手に入れることができうまい具合だな、と私は考える。似非カシヤンは、B……とルネ・クレ

ル（だと思）も一緒に連れて行くとはっきり述べる（彼はB……の名を二度も繰り返す）。私が講演せねばならぬ場合には、書きはじめようと絶えず考えていた或る本のための種々の材料を、その講演のテーマに利用しようと私は考える**。

*私のかつての恋人

**それが本書である

(O. C. II, pp.118-120)。

このように8月26日の夢は、二つの夢物語から構成されており（後でこのことは問題にする）、二か所にブルトン自身による原注が付されている。ここではそれを*と**で記して、最後に置いた。

今更言うまでもないことだが、ここに記述された夢の記述それ自体は、いわゆる睡眠中に見られる夢からはじまって、幻想あるいは文学作品において言語化された産物まで含む「夢内容」である。換言するなら、これは「顕在内容」(contenu manifeste / manifester Inhalt / manifest content)ともいわれ、その表面上の形象であるものを読んだだけでは、われわれ読者にはおよそその内容は荒唐無稽で、皆目意味がつかめない（おそらく夢を見て、すぐにそれを記述しているときのブルトン自身にとってさえそうであろう）。それに対して、「夢の思考」(pensée (latente) du rêve / (latente) Traumgedanken / (latent) dream-thoughts) すなわち「潜在内容」(contenu latent / latenter Inhalt / latent content) がいわゆる夢の本来の意味するところである。こうした一種の暗号である、夢の語りかける事柄を、夢の思想内容として、自分自身も含めて、他の人間にとっても（ある程度）明らかにするためには、それなりの手続きが必要とされる。そのための夢の分析作業なのであり、かつそれを補足説明するための「解説的覚書」なのである。

とは言いながら、ここからわれわれの躊躇逡巡がはじまる。まず、ブルトンによる「分析」ならば「解釈的覚書」は、かなり長いものなので、時間的にも紙幅的にも、われわれはそれらすべてを追って検討することは不可能である。特にブルトンによる夢の「分析」は、緻密を極めこれ以上徹底したものはないといってもよいもので、ほとんど夢の記述の文章一つひとつに及んでいる（プレイヤッド版にして約11ページ！）。また仮に、われわれがそれら分析と覚書をすべて丹念に追ってみたところで、夢のテキストの読解あるいはそこに表わされたイメージ等から連想される隠されたメッセージは、原則的には夢を見たブルトン本人にしか理解できず、また意味を持たないはずである。それらをいくぶんでも他人に分かりやすくするのがまさに夢解釈、すなわち顕在内容から夢の思想へと変換する翻訳作業の目的であるが、これもまたさまざまな意味で問題がないとはいえない。まず夢自体が本来構造的に示す抵抗がある。いわゆる二重の歪曲作用からなる「夢の作業〔夢工作〕」(travail du rêve / Traumarbeit / dream-work) がこれにあたる⁸⁾。これにはまず一次加工とよばれるもの、すなわち、「圧縮〔縮合工作〕」(condensation / Verdichtung / condensation)、「置き換え／移動〔遷移工作〕」(déplacement / Verschiebung / displacement)、「形象性への配慮〔呈示可能性への顧慮〕」(figurabilité (prise en considération de la-) / Rücksicht auf Darstellbarkeit /

considerations of representability) があり、そして「二次加工」(élaboration secondaire / sekundäre Bearbeitung / secondary revision) として、夢は本来それが意味しようとしているものを巧妙に隠したり、歪曲したりする。それを一つひとつ解きほぐしていくのが分析作業であるが、夢を見た本人がその分析作業に必ずしも成功するとは限らない。夢の巧妙な隠蔽、本人の「固着 (fixation)」による勘違いや読み間違い、あるいはもっと一般的に言って、自分の社会的身分や職業にふさわしくない事柄に対する遠慮⁹⁾などが、本来あるべき夢の思想内容の発現を妨げてしまう。

こう書いてくると、夢を見た本人でないわれわれが、ブルトンの夢を読むこと、ないしは分析することは無謀で不可能な試みのように思われる。しかしその一方で、ブルトンは自分の夢をわれわれ読者に対して開示しようとして試みている。分析や覚書、その他の必要な説明を付して、可能な限り、それを読みうる形にして提供しようとしている。すなわち、われわれは『通底器』という作品、それを読むことを要請されているのである。

ともあれ、ブルトンの導きに従って、われわれも夢分析に着手してみよう。ブルトンのように、徹底的かつ完全にはいかないまでも、ブルトンのメッセージを最低限に受容しうる程度に。

まず、夢の冒頭に現れる二人の女性については、気の狂った「一人の老女」はナジャであり、彼女に憎まれ、追跡されている女性 X はシュザンヌ・ミュザールである。「私」は友人のジョルジュ・サドゥールとともにこの追跡をかわし、X をかくまおうとする。この狂女の追跡とその逃走について、「分析」では、ブルトンは以下のように書いている。

自分について書かれた私の本を読み腹を立てたかもしれないナジャが、精神が正常に戻っていようといまいと、ひょっとしたら帰ってくるかもしれないという可能性に対する防衛 (défense)。彼女の精神錯乱の進行と、それに続く彼女の病院への監禁という事態に、ひょっとしたら私が心ならずも加担したのかもしれないという責任問題 (responsabilité) に対する防衛。(O. C. II, p.122)

ここでは『ナジャ』で主要な人物として登場させておきながら、結局は、そのことによって彼女を利用して捨ててしまったのではないかというブルトンの懸念と後悔が表明されているであろう。1926年10月4日に突然自分の目の前に現れ、まるで妖精さながら、この世のものとは思われぬ夢のような魔法のような、「不可思議」な出来事をブルトンに体験させ見せてくれたナジャ。そのナジャとブルトンとの出会いとつきあいは、作品に描かれているように、わずか一週間足らずしか続かなかった。その後、二人の間はぎくしゃくし、異常で突飛な言動をつのらせていったナジャは、最後には、狂人として、パリのサン＝タンヌ病院へ監禁されてしまう。自分自身、精神科の医師であったブルトンがナジャの病気に歯止めをかけ、悲劇を避けることができたはずなのに、それをせず、このような作品を書いて売名行為をし、あまつさえそのなかで、精神医学批判を披歴するとは、云々という批判が周囲から出たのは事実であったようだ¹⁰⁾。

それが「分析」の中にある、「責任問題」ということの意味であるが、この「責任問題」には別の

意味も含まれている。それがシュザンヌとの不和の原因につながっている。先の引用のすぐ後にはこうある。

この責任問題を、Xは怒りにかられたときにはよく、あなたは今度は私の気を狂わせようとしているんだわ、と私に投げかけるのだった (O. C. II, p.122)

男女の痴話げんかの勢いからでた言葉といってしまうえばそれまでだが、シュザンヌのほうでは、やはり、ブルトンが今度は自分を標的にして、第二の『ナジャ』を書き上げる材料にしようとしているのではないかという不安を抱いていたのではないだろうか。ベルルという夫がありながら、大胆にも駆け落ちまがいのことを企て実行していたのだから、この不安はおおいにありうることである。それに加えて、ここには経済的な問題が深く絡んでくる。夢のなかに「私は手元に残っていた金を全部彼女に渡して、家賃を払ってくれるようにと頼んだ」ということばがあるが、これは二人の同棲生活では事実関係であったようだ。ブルトンは、「分析」でこうコメントしている。

それが間違っていたか正しかったかはともかくとして、私はしばしばこう思いこもうとした。当時私が金銭的に困っていたということが、彼女の出ていこうとする決意と無関係だったわけではない、と。これはまた遡って言えば、ナジャに対する自己弁護でもある。最後のころ、彼女の手もとに金がないのに与えてやることもできなかった自分を、私はいくどとなく責めたものだ (O. C. II, p.123)

経済的不如意による愛の挫折。これはブルトンにとっては、やはりおおきな不安材料であったはずだ。結局、金銭のために彼女は「もう戻ってこない」(O. C. II, *ibid.*)。ナジャに対する、金銭的、そして文字通りの精神的援助、その報われぬ結果については、先に述べた通りである。

さて、急いで残りの、夢の重要と思われる部分を片付けよう。ナジャとおぼしき老女とXとの追跡、それを妨げようとする私ブルトン。どうやら、この夢の前半部分では、ブルトンから去っていった二人の女性を忘れたいという潜在願望が働いているように思われる。第一に、夢のなかに「マノン」という女性が突然出現する。この女性は、ブルトンの初恋の相手である従姉妹であり、ブルトンは初めて彼女に会った19歳の時、そして今回の夢のなかでもおそらく、彼女に「強い性的魅力を感じ」(O.C. II, p.123) たのだった¹¹⁾。第二に、老女が入っていった建物で、姿の見えない(消えつつある、忘却の途上にある?) 誰か管理人のような人物が「入ってはいけないという合図をする」(O.C. II, p.119)。その建物には、よくわからないが、Xの過去にまつわる、忌まわしい事件が隠されているので近づかないほうがいいという暗示。最後に、夢のなかに現れる多様な女性がいる。ナジャとおぼしき老女の顔は、「夢のなかではかなりぼんやりしていた老女の顔立ちについて言うなら、それが、食事のときにあまりにもしげしげと、またあまりにもすぐ近くのテーブルから私を見つめるある年配の御婦人の顔立ちとごっちゃになっている、あるいはその御夫人の顔立ちか

ら借用されている」(O.C. II, pp.122-123)。このイメージ形成は典型的な「圧縮[縮合工作]」¹²⁾の結果である。ここでは老女ではあるが、それ以外にもブルトンの夢やその源泉には、もっと若くて魅惑的な女性が登場していて、直接的ではないにせよ、この「圧縮[縮合工作]」とは無関係ではないだろう。ブルトンが滞在しているホテルの外のアーケードの下に置かれた「白いテーブル・クロスのかかったかなり大きな四角いテーブル」(O. C. II, p.124)でブルトンはいつも本を読んだりものを書いたりしていたのだが、「8月24日の月曜日」(O. C. II, *ibid.*)にその席に座った、ダム建設の仕事の夫の付き添いに来ている、ドイツ人の詩を書く魅惑的な女性(O. C. II, p.131)。そして『ナジャ』でわれわれにおなじみの女性も言及されている。ある日、シュルレアリスム本部に訪れ、手袋(実はその手袋はブロンズ製の手袋であった)を贈っていった「手袋の君」(O. C. II, p.130)リーズ・ドゥアルムである¹³⁾。ナジャとシュザンヌ以外の女性の登場、特に「圧縮[縮合工作]」によるそうした女性の出現は、夢のなかにおいてブルトンが恋愛感情の比重をそうした女性たちのほうへ移動させていることの徴候ではないだろうか。

ここまでは主に、夢の前半部分、特に女性を中心に見てきたわけだが、ブルトンの夢全体に話を戻すなら、前半と後半の夢の著しいトーンの違いにだれもが気づかされることだろう。前半部分は狂女となって追いかけるナジャと逃げるシュザンヌ、そしてその二人との決定的な別離とそのことに対する考察。比較的ストーリー性がはっきりしている。夢の歪曲作用が弱いのか、それともブルトン自身ある程度意図的にわかりやすく記述しているのか、夢の記述と夢の思想との距離が近いように思われ、それだけ分析も流暢に流れているように思われる。ブルトン自身の分析がなくても、前半部分の夢の大筋の「欲望成就(accomplissement de désir)」は一般読者にも容易に読み取れるのではないだろうか。夢のテキストにも「それから、私は、自分だけの考えに没頭し、Xはもう二度と戻ってくることはないだろう、この老女は現にいま探している以外のところでは多分Xをつかまえることはできまい、と考える。こう考えて、私は安堵と口惜しさの入り混じった感情(……)におそわれる」とあるくらいだから。

それに比べて、夢の後半部分は難解を極めている。ブルトンの詳細な分析と断言とをいくら合わせ読んでも、これといった夢の「欲望成就」というものが見えてこないような気がする。またブルトン自身、分析によってそれを明らかにしようという気があまりないように思われる。これらのことに関しては後に触れるとして、その前に、ブルトン自身言及しているように、二つに分けられた夢という形式的な事柄を検討してみよう。

まず、このことについては、フロイトが『夢解釈』の第6章「(C): 夢による呈示の手段」で詳しく語っている。そしてそれは夢が持つ根本的性格に起因している。全体的なイメージとして出現するしかない夢は、仮定や予想、先と後、原因と結果、二つの事項の対立といった「論理的連関(relations logiques)」や「因果関係(relations causales)」を表現することができない。もっと簡単に言うと、「[もしも～であれば、～であるから、ちょうど～のように、～であるとはいえ、～であるかもしくは～]」その他もろもろの、それがなければわれわれが文章も談話も理解できないような

あらゆる前置詞」（『夢解釈Ⅱ』、前掲書、p.317）は夢のなかでは欠如しているのである。それでは、それらをどのように解決するかというと、それらを「時間的同時性（relations simultanées）」に変換し、呈示するのであるとフロイトは言っている。つまり、全体的にまとまった一つの夢のなかにはすべてを押し込めてしまうことにより、こうした「論理的連関」は無視または排除されるか、不手際な「置き換え〔遷移工作〕」に代えられるしかない（例えば、「貴族の身分」を「高い場所」で表すといったような）。あるいは、もう一つの方法は、夢をいくつかの夢に分割して、それを順番に夢見させるのである。

因果関係（relations causales）を呈示するためには、夢は二つの手順〔そのうちの 하나가上の「置き換え〔遷移工作〕」の例である〕を使いこなす。それらは本質的には同じところに帰着する。たとえば、これがこうこうであったから、これとあれが生じざるを得なかった、という夢思想があったとすると、より頻繁に用いられる呈示法は、まず副文を前夢として持ってきて、そのあと主文を主夢としてそれに繋げるというやり方である。今までの私の解釈が間違っていなければ、この時間的順序は反対になることもありうる。ただし夢の大きく詳しいほうの部分が夢思想の主文に相当することには変わりはない。（『夢解釈Ⅱ』、p.49。I. R. M., p.271）

ここで説明されているのが、いわゆる夢の分割とでもいうべき「前夢」と「主夢」である。ブルトンもこのことに注目し、『通底器』の夢分析で言及しているのだが、ここでフロイトとブルトンとの理解には重大な相違がみられるように思われる。まず、フロイトにとって、夢の「論理的連関」や「前置詞」ないしは「接続詞」の表現不可能性は、とりあえず、たんに「夢の作業〔夢工作〕」の過程で生じる構造的欠陥であるのだが（それが分析の解決ヒントになることはあるとしても）、ブルトンは、この二つの夢の「論理的関係」すなわち「因果関係」そのものが夢を見た人間の「欲望成就」に直結する効果を生み出していると考えているように思われる。

夢がその性質上、しばしば「前夢」と「主夢」に分けざるをえないことについては、ブルトンはフロイトと同意見である。しかし、問題はその後である。フロイトにとっては、夢の機制の欠陥の一つを補うものにすぎなかったものを、ブルトンは、もっと強い意味と積極的な効果をもっているものと考えている。これは、ブルトンが、現実世界と同じように、夢のなかにも「時間」、「空間」、「因果律」があることを断固として主張し、それを否定する夢理論家（フロイトも含めた）たちを、宗教家、神秘主義者、あるいは観念論者として激しく批判していたことに由来していた。夢についての理論の検討という射程を超えて、それを思想的・イデオロギー的装置として働かせようと考えていたブルトンの意図の反映なのである¹⁴⁾。したがって、場合によって、夢はある種の治癒的作用というべきものを夢見る人間に及ぼす。「このようにして夢を見た当人によって見いだされ承認された解決は、目覚めたときその人がその解決を意識しようとしまいと、その人の心の動きの数々にきわめて深い影響を及ぼすのであり、資料に種々の秘密書類を添えてやることによって、その人

の判断を強化するのである」(O.C. II p.127)。つまり、単純化して言えば、この二つの夢の結合によって、夢を見る人の「非常に激しい、現実の不安」(Ibid.)に解決がもたらされるのであり、そしてそれは主にモラルにかかわっている。ここでモラルとは、ブルトンにとっては、なによりも恋愛のモラルの云いである。

この不安は、私が数ヶ月前から陥っていたモラル上の難点、つまり私が補足的説明のなかで価値あるものとして認めた、ただ一人の女性のためだけの愛という考え方、この女性にたいする私の愛より後はおそらく人間のなかに生き続けることはあるまいと思われるあの考え方から、ある別の考え方に自分の心が移って、しかもそのために自分の価値が少しもそこなわれないと自分自身に納得させることがいかにしてできるのか、という問題に直面したさい私の陥っていたモラル上の難点に由来するものである。誰でも知っているように、その本性からして楽観的で心を鎮めるものである夢は、少なくとも身体上の憂慮されるべき状態の影響を受けないかぎり、そのような数々の矛盾から実生活の方向に有利に働くものをつねにひきだそうとする(Ibid.)。

その有利に働くものとは、具体的には、不安の主原因をなしているXに対する、執着からの心情的離脱、Xの忘却である。

しかし[Xに対する] 怨みの念はその能動的な形においてはすぐに攻撃を受け抑圧されて、後続の一連の考え方のなかに感じとられる変更を引き起こす何らかの現実の動きを眠っているあいだにもたらしたのだと私には思える(O.C. II, p.128)

このようにして「前夢」から「主夢」への移動そのものによって、ブルトンによれば、後が続く、つまり「主夢」における考え方やイメージ、夢そのものに大きな変更をもたらす「何らかの現実的運動」がもたらされ、それによってそれまで続いていたXへのブルトンの愛情的固着は、次第に弱まっていくとされる。

以上のブルトンの見解は、フロイトの理論にてらしあわせてみるなら、夢の構造に関する大いなる誤解あるいは過大評価、まさにフロイトに言わせれば論理的飛躍であろうが、ブルトンにとってはまた別の解釈があるようである。これについては、後にまた触れよう。

Ⅲ－2. ブルトンの夢 (2)

ところで、これでブルトンの夢の分析が完了したとは、まだまだいえないであろう。まず、ここまで述べてきたことは、ブルトンの夢の半分にすぎないこと、これは言うまでもない。それに、夢のなかに反映されている不安材料はナジャあるいはシュザンヌとの挫折した個人的恋愛感情だけではないからである。こうした恋愛感情以外にも、危機的状况に陥っているシュルレアリスム運動の活動のこれからの方向性をいかにするか、さらには共産党との関係や政治的・イデオロギー的選択

といった、解決されなければならない問題がまだまだ残されている。夢はもちろんこれらのことについても語っている。われわれは急いで夢のもう半分、後半の夢を見ていかなければならない。

後半の夢は二つの主題から成り立っている。一つ目が、夢のタイトルとして挙げた「ノスフェラトゥ」のネクタイであり、二つ目が、二人の共産党員がでてくるドイツでの講演のことである。

まず、ネクタイ選びについては、ブルトンがネクタイがその用途と形状により、夢の表現上の典型的象徴例の一つとして、それがペニスの象徴であることを認めており、自分はネクタイに対して「コンプレックス」と反感を抱いていると告白している (*O.C. II*, p.128)。ここで、新しいネクタイを選んで買うということは、恋愛の、特に性的な意味合いにおいて、新規巻き直しを意味しているであろう。ブルトンもそのところは十分に承知している。しかもこう言っているくらいである、「私がずいぶん着けたに違いないそのネクタイは、いまではすっかりくたびれている」 (*O.C. II*, p.129)。ネクタイを変えるということは、新しい恋愛対象を選んでいくということである。店の店員に勧められるが、自分の持っている「ごく細い白の斜め線が入っている」、「暗緑色のかなり平凡な」ネクタイに似ているだとか、それが自分の持っている「赤いワイシャツ」とよく似合うとお世辞を言われるとか、もう在庫が少ない二年前に流行した「ノスフェラトゥ」のネクタイを勧められるとか、まるで合コンかお見合いの場面を見せられているようではないだろうか(?)。

冗談はさておき、ここで気になるのは、やはり最後の「ノスフェラトゥのネクタイ」である。くどいようだが、もう一度引用する。それはこう描かれていた。

それは暗紅色のネクタイで、その両端の一つずつ、——結んだときには——少なくとも見える方の端に、ノスフェラトゥの顔が二度、白く浮かび上がって現れる。その顔は同時に、地名標示など全くないフランスの地図になっており、その東部国境、緑と青でごく簡略にかかれていますので私にはむしろ河ではないかと思われたその東部国境は、実に人をびっくりさせるような具合にこの吸血鬼のメーキャップを描き出している。私は一刻もはやくこのネクタイを友人たちに見せてやりたくて仕方がない。 (*O.C. II*, p.120)

ブルトンの説明によれば、このネクタイの描写、特に後半部分でそれが「地名表示など全くないフランスの地図」、そして「東部国境」は、先に言及したドイツ人女性にも関連している。

夢は、ここでもまた、同時に二種類の欲望を実現している。第一は、この女性と自由に話をしてみたいという欲望であり、第二は、一世紀のあいだにカント、ヘーゲル、フォイエルバッハ、マルクスを生みだした思索と光明の宝庫であるこの素晴らしい国と、私がいま生きているフランスとのあいだにある一切の相互無理解——これは愛国主義の絶好の餌食である——の原因をとり除きたいという欲望である。 (*O.C. II*, p.132)

ここでブルトンが言及している、夢の「二重の欲望」とは、「多元決定 [重層決定] (*surdétermination* / *Überdeterminierung* / *overdetermination*)」を指している。フロイトが言うように、「多元決定

[重層決定]とは、「無意識の形成物——症状、夢など——が、複数の決定要因に関係しているという事実」¹⁵⁾である。魅惑的な女性と話をしてみたいという欲望、そしてフランスでは軽視され、敵意さえ持たれていた当時のドイツの哲学思想・イデオロギーを人々に理解させ、それらをシュルレアリスムの活動にも組み込みたいという二つの欲望が同時にノスフェラトゥのネクタイに表現されている。ドイツでヒトラー政権が誕生するのが1933年、1939年に第二次世界大戦が勃発するまで、あと6年である。

それにしても、この夢の場面でよくわからないのは、夢そのものよりも、むしろ次のブルトンの自己分析の意味内容である。ノスフェラトゥから連想されるイメージ、あるいは夢材料となった人物が二人いるのだが、その一人は、「25日の夕方」(O.C. II, p.129)、ブルトンと同じホテルで夕食をとっていた男であるが、次のように描写されている。

この紳士はとろんとした目 (l'oeil très éteint) をしており、まず教師であると思われなかった(それもたぶん大学の三文教師だとサドゥールは考えていた)。彼の顔色 (Son teint) が、まず最初に私の視線をひきつけた。それは私に、そのとき私がそう言ったように、鉛筆がただところどころほんやり黒くなっているのどにか眼やひげのありかがわかるあの消しゴムで消された (gommé) デッサンという印象を与えた。私は一方では、レーニンが『唯物論と経験批判論』のなかで執拗に非難攻撃している典型的な反動的哲学教授を思い浮かべた (O.C. II, p.129)

しかもこの外見上不明確な人物の隣に座っているのが、上で言及した、リーズ・ドゥアルム似の妻である。もうひとりはこちらである。

他方では、私はパストゥール研究所の実験主任であるF氏を思い浮かべたが、この人は科学者としてはその容貌が奇妙にほんやりとしてとらえどころがないとつねづね私は思っていた。(……)「抹消された[目立たない] (effacé)」人物であるF氏がノスフェラトゥを思わせるのは(略) (O.C. II, p.130)

この二人の人物の共通した特徴は、顔の印象がきわめて薄く、まるで消しゴムか何かで簡単に消されてしまえるというものである。そしてブルトンの連想は、最初の大学教師とおぼしき夫から、パストゥール研究所の実験主任F氏を経て、最後にはブルトンが覚書をしたためていたノートに偶然印刷されていたキリンの生態説明にたどりつく。その生態説明が、以下である。

軟毛の生えた角をもつ反芻動物の仲間には、軟毛の生えた皮膚におおわれた頭蓋骨が突起して角となった反芻動物が含まれている。この軟毛の生えた皮膚は頭部の皮膚と続いており、けっしてむけ落ちることはない。このような種はただ一つだけしか知られていない。すなわち、キリンである (Ibid.)

ブルトンの以上の連想は、キリンの角と頭の皮膚の毛と「ノスフェラトゥの毛の生えた耳」(Ibid.)、そして夢を見た前の日に「このノートと他の幾冊かノートを選んで買った」(Ibid.) ことから由来しているという。その連想を成立させる理由に、キリンの首の長さとなネクタイとを性的な意味で同一視していること、つまり、ペニスを想起させることをブルトン自身認めている。それはそうであろうが、それだけの理由ならここでこうした連想を誘引してきた二人の人物の存在意義がわからなくなる。二人の人物も重要な役割を果たしている、もっと他の根拠もいくつか見つかるだろう。

二人の人物においてもっともわかりやすい共通点は、大学教師もF氏も（そしてノスフェラトゥも）、文字通り「影の薄い」、存在価値の低い人物であるとみなされているということである。大学教師はレーニンに反動的哲学教授あつかいされた人物の同類であり、F氏は夢のなかで「抹消された (effacé)」人物である。そしてノスフェラトゥはといえば、吸血鬼であるがゆえに、朝日を浴びたなら姿が消えていくモンスターである（その映画の一場面を映した写真が『通底器』に収められている）。

しかしながら、そうした存在価値の低い影の薄い男であっても、かならずしも、体毛が薄く、精神的に脆弱なわけではない。むしろそうした人物に限って、逆に全身体毛に覆われ、体格的には頑強で精神的であって、異性にとっては魅力的であるかもしれない。大学教師にはリーズ・ドゥアルムに似た妻がいるし、F氏はさておき（この人物は夢では、ソ連のボルシェビキ党員リャザノフを想起させるとされている）、ノスフェラトゥは犠牲者の美女を求めて毎夜、コウモリのように飛び回るだろう。さらに角にまで軟毛の生えた「首の長い」生き物はただ一種、キリンしか存在しない。

こうして、ブルトンが軽蔑するような人物たちに限って、ブルトンの性的ペニス・コンプレックスを刺激し、ブルトンが渴望するような女性をものにしてしている。何とも皮肉でいまましいことである。だからこそ、夢は、そうした人物たちに逆襲を企てるために、彼らの姿=存在を希薄にすることによって価値を貶めているのではないだろうか。しかも、そうすることによって、後に残された女性を手に入れることができるかもしれないのである。まさに、一挙両得である。ただし、ここでは、ノスフェラトゥだけはたんなる否定的な嫌悪の対象ではなく、「両価性 (アンビヴァレンツ)」¹⁶⁾を備えた存在として現れているように思われる。ブルトンだけでなく他のシュルレアリストたちにとっても熱狂の対象となった、このスクリーン上の吸血鬼は、常に「歓喜と恐怖の入りまじった」(Ibid.) 感情を抱かせていたのだった。

最後に、夢の残りの部分であるが、これも比較的明白であろう。ここに登場する二人の共産党員のカシャンとヴァイヤン=クーチュリエ（すでに書いたように、彼は、1932年にA.E.A.R.の書記長となった人物と同一である）に対する、ブルトンの嫌悪感は明白で、夢のなかでは「似非カシャン」は、ブルトンによれば、先にも言及したリャザノフの分身であるという (O.C. II, p.133)。少なくとも夢のなかでは、シュルレアリスムと共産党との共闘の可能性は否定されている。現実においても、一時接近し融合の可能性さえ示した、この二つのグループのそうした結合は後に決定的に決裂し、反目を続けることになる。

ところで、この夢には、少なくとも特筆すべき点が二つある。まず最初の「私は右の方に百八十度むきを変えている」。これはフロイトも『夢解釈』で言及している点である¹⁷⁾。夢のなかでは、「右」、「左」という方向は、「倫理的」意味をもっている。シュテークルによれば、「右の道は常に正義の道、左の道は罪の道を意味する。(……)常に、夢見た人の個人的な道德観から見ての話である」。したがって、ブルトンが、夢のなかで「わたしは右の方に百八十度むきを変えている」というのは、ブルトンの全面的軌道修正、しかも正しい方向への修正を示している¹⁸⁾。この軌道修正は、この場限りの、一過的なものではなく、夢全体の流れを覆う全体的なものであろう。すなわち、夢の前半の老女とXの追跡行からからくも免れ、そのことで両親の叱責を受けもしたが、この二人の女性のことについては決着がついたこと、夢の後半では、ノスフェラトゥ・ネクタイというまたとない「掘り出し物」、つまり「シュルレアリスムのオブジェ」を見つけたこと、知人の共産党員の嘲笑にもかかわらずドイツへ講演へこれから出かけること。すべてを軌道修正して、新たにことにあたっていくのである。幸いなことに、「少しばかり金を手に入れること」もできた。万事順調にいきそうである。夢のなかにはこのような言葉がある、「明日出発だ」。

以上、ブルトンの夢を検討してきたのだが、そこではブルトンの公的私的の不安と悩みが夢の源泉となり、夢を形成しているということである。挫折を迎えたがゆえに新たなものがぜひとも必要な恋愛、その原因ともなった生活上の、あるいは社会的貧困の問題、シュルレアリスムの運動の未来をも左右する、芸術的かつ政治的態様の決定。ここではすべての要素を検討することができなかったが、恋愛関係、倫理的選択、思想的混迷、その他が大きく纏れた糸のように絡まっている。しかもそこには夢の検閲、「夢の作業[夢工作]」が働いていて、誰であれ、本人でさえも、一つの夢の内容をすべて組みつづすことはできない。フロイトもこう言っている、「縮合[圧縮]の作業は、甚だ度はずれなものになることもあり得ます。縮合の助けを得て、二つのまったく異なった潜在的思考過程が、現在の夢では一つのものにまとめられてしまうことも、場合によっては可能です。ですからそのような場合には、ある一つの夢の一見十分な解釈を得ても、そこでさらに可能である重層解釈(surdétermination)を見逃してしまうのです」¹⁹⁾。

しかしそれは、夢に対するとき必ず横着する障害であって、フロイトも、またブルトンも十分承知していたことである。

再びブルトンの『通底器』に戻るなら、ここまでが、夢の材料ともなったブルトンの公的・私的の生活が明らかにされ、それがどのように夢に現れていたのかの確認である。そこから何を引きだし、何をブルトンはしようとしているのか。以下、その問題の検討が残されている。

(この稿続く)

註

なお、論文中的アンドレ・ブルトンの著作からの引用は、特別な指示がない限り、André BRETON, *Œuvres complètes*, tome I, tome II, tome III, tome IV, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1988-2008に依拠しつつ、O.C. と略記し、引用箇所末尾に巻数とページ数のみを付した。

特に『通底器』(O. C. II, pp.101-215)に関しては、邦訳は主なものとして以下の二冊がある。

a) 『通底器』豊崎光一訳、『アンドレ・ブルトン集成1』人文書院、1976 に所収。

b) 『通底器』足立和浩訳、現代思潮社、1978。

本論の引用にさいしては、主にb) の引用を使用させていただいた。発行が新しいこと、そして特に『通底器』の本文において、ブルトンが取り上げているフロイトの著作『夢解釈』の該当箇所を注に引用し、比較しているために、非常に使い勝手が良い。もちろん必要に応じて文章を変更したことがある。

また、ブルトンの伝記的記述については、以下の文献に負うところが多い。

Marguerite BONNET, *André Breton Naissance de l'aventure*, José Corti, 1988.

Henri BEHAR, *André Breton Le Grand Indésirable*, Calmann-Lévy, 1900 [アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997.]

Mark POLIZZOTTI, *André Breton*, Gallimard, 1999.

André BRETON, O.C. t. I と t. II の《Chronologie》の部分。

André Breton - La Beauté convulsive, Centre Georges Pompidou.

Dictionnaire André Breton, sous la direction d' Henri BEHAR, Classiques Garnier, 2013.

さらには、フロイトの著作についてであるが、前回同様、仏訳と邦訳は以下の版を使用した。フランス語訳としては、

c) Sigmund FREUD, *L'Interprétation des rêves*, traduit en français par I. MEYERSON, nouvelle édition augmentée et entièrement révisée par Denise BERGER, Presses Universitaires de France, 1996 (1926) (以下、I.R.M. と略記)。

d) Sigmund FREUD, *Oeuvres Complètes IV, L'interprétation du rêve*, PUF, 2003 (以下、I.R.O.C. と略記)。

e) Sigmund FREUD, *L'Interprétation du rêve*, traduction inédite par Jean-Pierre LEFEBRE, Seuil, 2010 がある(以下、I.R.L. と略記)。

日本語訳としては、

f) フロイト『著作集2』高橋義孝訳、人文書院、1991。

g) 『フロイト全集4 夢解釈I』新宮一成訳、岩波書店、2007、そして『フロイト全集5 夢解釈II』新宮一成訳、岩波書店、2011を参照した(前者は『夢解釈I』、後者は『夢解釈II』と略記する)。

また英訳としては、

h) *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Volume IV (1900), The Interpretation of Dreams (First part)*, London, Vintage, 2001 (1953)、そして *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud Volume V (1900-1901), The Interpretation of Dreams (Second Part) and On Dreams*, London, Vintage, 2001 (1953) も参照した。

なお、本論中では、仏訳はc) を、邦訳はg) を主に使用した。仏訳はやはり、後年おおはばな改訂がなされているとはいえ、ブルトンが参照した仏訳にもっとも近いものであるからである。邦訳のほうは最新の翻訳であり、ドイツ語の各種のフロイト全集、そして、娘のアンナ・フロイトも関わった権威ある英訳の *The Standard Edition* の情報をも注釈に盛り込んだ、完備された版になっているからである(前回の拙論執筆段階では、下巻がまだ刊行されていなかった)。したがって、本論を通してフロイトの著作は『夢解釈』というタイト

ルに統一することにした。しかしながら、夢に関する基本的な専門用語は、f) で用いられている従来の既存の定訳を採用した。『夢解釈』の新訳は、訳文の完成度を上げることはもちろんであるが、同時に用語も刷新しようという画期的な試みである。

しかしながら、本論の記述の中では、不必要な混乱を避けるために、従来使われていた定訳を採用することにした（その際には、g) の用語もできるだけ記載するようにしたが）。専門用語に関しては、基本的に、フランスで出版され、広く親しまれ使われている、以下の二つの辞典・事典に基づいた。

i) ラプランシュ / ポンタリス『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1995 (1977) [J. Laplanche - J.-B. Pontalis, *Vocabulaire de la Psychanalyse*, Quadrige / Presses Universitaires de France, 2002]。

j) 『精神分析事典』R・シエママ編、弘文堂、平成7年。

もちろん、仏訳邦訳ともに、必要に応じて、他の文献を参照したことは言うまでもない。

- 1) 「けっきょく、夢の思考は、それ自体の作業にたいするいかなる狡猾な、悪意に満ち、人を困惑させる評価を前にしても一歩も退かず、夢を見ている人がその夢の思考について抱き得る観念と、夢の思考それ自体とを比較することによって、この比較から一層の利益が得られるであろう」(O. C. II, p.143。一部訳文を変更した箇所がある)
- 2) フロイト『夢解釈 I』、第五章「夢の素材と夢の源泉」を参照のこと。
また、ラプランシュ / ポンタリスの辞典には以下の説明がある。「夢の潜在内容を構成するものとしては日中残滓物、幼児期の記憶、身体の受ける印象、転移状況をほのめかすもの、などが考えられる」(ラプランシュ / ポンタリス、前掲書、p.285、「潜在内容」の項)。
- 3) 以下のブルトンをめぐる当時の状況については、前回の拙論で述べたので、詳しくはそちらを参照されたい。「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(I)」、『人文社会論叢 人文科学篇』第24号、弘前大学人文学部、2010, pp.1-12。
- 4) Louis-Albert REVAH, *Berl, un juif de France*, Grasset, 2003.
- 5) このパリのリヨン駅での別れの場面は、『ナジャ』の最後で使われている。シュザンヌとベルルを乗せた汽車、それを見送るブルトンと何人かのシュルレアリストたち。その汽車は、こう描かれていた。「美は、リヨン駅でたえず身はずませている汽車のようなものだ。それは決して発車しようとはせず、これまでにも発車したことがなかったと私はわかる」。この「痙攣的美」を体現した、発車しようとして発車していない弁証法的運動状態にある汽車は、もちろん、ブルトンの心情、願望をあらわしたものだ(*Nadja*, O. C. I, p.753)。また翻訳の『ナジャ』巖谷國士訳、岩波文庫、p.189 とその注を参照されたい。
- 6) 濱田明・田淵晉也・川上勉『ダダ・シュルレアリスムを学ぶ人のために』、世界思想社、1998、pp.161-162の「革命的芸術作家協会 A. E. A. R.」の項目、および、『文化の擁護 1935年パリ国際作家大会』相磯佳正・五十嵐敏夫・石黒英男・高橋治男編訳、法政大学出版局、1997を参照されたい。5日にわたって国際的に有名な作家・知識人の報告と討論が収められている。フランスからは、ジッド、マルロー、バルビュス、アラゴン（もはやシュルレアリストならぬ共産党員の）が議長などの役割で活躍している。ちなみにこのさい、仲裁に奔走したシュルレアリスト詩人ルネ・クルヴェル (René CREVEL, 1900-1935) が、交渉の失敗に絶望して自殺するという事件が起きている。
- 7) 《Discours au congrès des écrivains》(O. C. II, p.459) [「作家会議における発言」田淵晉也訳、『アンドレ・ブルトン集成5』、人文書院、1971、p.215]
- 8) ラプランシュ / ポンタリス、前掲書、「夢の作業」項目、p.455を参照されたい [J. Laplanche - J.-B. Pontalis, *op.cit.*, pp.505-506, 《TRAVAIL DU REVE》]。
- 9) 先の拙論でも言及したように（「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み(I)」、前

掲論文、p.9)、フロイトが「イルマの注射」の分析に関して、最終的に自分の性的欲望に踏み込まざるを得ない箇所に立ち至ったとき、躊躇し分析中断したこと、そしてブルトンがこのフロイトの判断を非難し、フロイトに挑戦し、その困難を克服するために自分の夢分析を行ったことが、そもそものブルトンの夢分析の発端である (O.C. II, p.118)。フロイトはこう言っている、「ここでもなおこの夢 [=イルマの注射] のもとにとどまり、さらなる解明をそこから引き出し、夢が新たに提起する謎を論じてゆくこともできないわけではない。どの個所からさらに思考連関が続いてゆくであろうかということも、私自身にはわかっている。しかし、自己自身の夢を解釈するときには配慮すべき点がいくつかあるわけで、そうした配慮が解釈作業を押しとどめる。こういう留保をすかさず非難しようと待ちかまえていた人は、では私より正直になれるものかどうか、自分でお試しになっていただきたい。ここに示された方法で夢解釈を進めてゆくならば、夢には現実に意味があり、決して多くの著者たちが言うような破綻した脳活動の表現などではないことがわかるだろう。最後まで解釈作業を進めてみれば、夢は、一つの欲望成就として認識される」(『夢解釈 I』、前掲書、p.164. *I. R. M.*, p.112)。この文章を読むと、ブルトンはフロイトの挑発にまんまと乗せられたかのような印象を受けるであろう。

- 10) 実際には、ブルトンはナジャの病気悪化を見て見ぬふりをして、放置していたのではなく、できるかぎりの手立てを尽くそうとしていた。同じく、精神科医で友人であったテオドール・フランケル Théodore FRANKEL (1896-1964。学生時代からのブルトンの友人。結局、ダダ・シュルレアリスムの運動には直接参加しなかったが、これらの運動にかかわった友人たちは多い)に相談したが、ナジャの病状や看護については、絶望的であったようだ。一方、精神医学批判をおこなったのは、これはれっきとした事実である。その趣旨は、当時のフランスの精神病院は、治療施設ではなく、逆に狂人や社会的不適格を監禁する感化院であるというような、フーコー的な批判を展開している。「いちどでもその内部に立ち入ったことのある人なら、精神病院こそは狂人をつくる場所だということを知らないはずはない。」(O. C. I, p.736 [『ナジャ』、前掲書、p.163])。このブルトンの激しい非難に対して、フランス精神医学界は、『医学—心理学年報』でブルトンと作品『ナジャ』を激しく非難する記事を組んでいるが、そのコピーが『シュルレアリスム第二宣言』の冒頭に収録されている。
- 11) 本名マドレーヌ・ル・グーグス (Madelaine Le Gouguès, 1898-1949)。ブルトンの従姉妹、なかなか大胆で情熱的な女性だったようである。1915年、ブルトンは兵役中に、一日休暇を取って、彼女と一夜を過ごしているが、ブルトンはそれを「恐るべき恋愛体験 *aventure sentimentale terrible*」とフランケルの手紙に書いているという。 *Dictionnaire André Breton, op. cit.*, pp.648-649 の「Manon」の項目 (Henri BEHAR 執筆)。および、Henri BEHAR, *André Breton Le Grand Indésirable, op. cit.*, p.35 [アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』塚原史・谷昌親訳、思潮社、1997、p.38]。また、Mark POLIZZOTTI, *André Breton, op. cit.*, p.39。ブルトンにとっては、青春時代の一時的な恋にすぎなかったようだが、16年後の夢にでてくるという意味では、ブルトン本人が思っている以上に、彼女はリビドーの備給の対象だったのかもしれない。
- 12) 「圧縮 [縮合工作] は最初に『夢解釈』(1900)において「夢の作業 [夢工作]」が行われる基本的機制の一つとして記載された。それはさまざまな方法で実施される。たとえば一つの要素 (テーマ、人物) だけが、それが夢のさまざまな思考のなかに何度もあらわれたり (結合点)、またさまざまな要素のちぐはぐな統一体としてまとめられる (たとえば複合人物)。さらに数個の像の圧縮により、それらに共通の特徴を保持するために、それと一致しない特徴が消されてしまうこともある」、ラプランシュ / ポンタリス、前掲書、「圧縮」の項目、pp.3-4を参照されたい [J. Laplanche - J.-B. Pontalis, *op.cit.*, p.89, 《CONDENSATION》]。
- 13) Lise DEHARME (MEYER)。『ナジャ』では、一ページにも及ばないエピソードだが、周知のように、彼女はその後、詩人として活躍する。その彼女にブルトンはかなりの間、愛情を抱き続けていたのは事実である。 *Najda, O. C. I*, p.679 [邦訳、pp.65-67] および *Dictionnaire André Breton, op. cit.*, pp.305-306 を参照のこと。

- 14) この点については、先の拙論「アンドレ・ブルトン『通底器』における夢の記述の一読解の試み（Ⅰ）」、前掲論文、pp.8-9を参照されたい。
- 15) ラプランシュ / ポンタリス、前掲書、p.308、「多元決定（重層決定）」の項目 [J. Laplanche - J.-B. Pontalis, *op.cit.*, pp.467-469]
- 16) 「同一の対象への関係に、相反する傾向、態度および感情、とくに愛と憎しみが同時に存在すること」（ラプランシュ / ポンタリス、前掲書、p.308、「両価性、アンビヴァレンツ」の項目 [J. Laplanche - J.-B. Pontalis, *op.cit.*, p.22] ）。
- 17) フロイト『夢解釈Ⅱ』、前掲書、p.103。I. R. M., p.307以下を参照されたい。
- 18) ここでフロイトが言及している、「右」と「左」が単なる方向だけではなく、ひろく倫理的価値をもって受け止められてきたというのは、民族学、人類学でも認められる現象である。フランスの例でいえば、ロベール・エルツ『右手の優越 宗教的両極性の研究』吉田省吾・内藤莞爾・板坂作美訳、ちくま学芸文庫、2001がある。
- 19) フロイト『フロイト全集15 精神分析入門講義』高田珠樹・新宮一成・須藤訓任・道籙泰三訳、岩波書店、pp.209-210。